

「アフガンで大地の医者となる

〜国際医療協力の22年〜」

講師 ペシヤワール会現地代表・医師

中村 哲氏

期日 平成十八年五月十八日（木）

場所 宮崎観光ホテル

## まえがき

この冊子は、平成十八年五月に開催した当協議会の第二十六回総会におけるペシヤワール会現地代表の中村哲さんの講演を収録、編集したものです。

中村さんには、「アフガンで大地の医者となるく国際医療協力の22年」と題し、人類愛に満ちた国際医療協力活動の取組みについて、わかりやすくお話していただきました。

この冊子が、学校、地域、職場などで一人でも多くの皆さんに読まれ、人権意識が高まりますとともに、一人ひとりが尊重され、個性と能力が発揮される社会が実現されますことを願っています。

最後に、発刊についてご承諾くださいました中村さんに心から感謝申し上げます。

平成十八年十二月

宮崎県人権啓発推進協議会

# 中村 哲氏 プロフィール



## (講師略歴)

1946年 福岡市生まれ

九州大学医学部卒。

1984年 パキスタンのペシャワールに赴任、パキスタンとアフガニスタンに診療所を建設、現在に至るまでハンセン病を柱に貧困層の診療にあたる。

2000年からはアフガニスタンの大旱魃に対して、井戸1400本以上を掘る。

2003年から全長14キロの灌漑用水路も建設中。

現職：ペシャワール会現地代表

PMS (ペシャワール会医療サービス) 総院長

主な受賞歴：1988年 外務大臣賞受賞

1992年 毎日国際交流賞受賞

1993年 西日本文化賞受賞

1996年 読売医療功労賞受賞

1998年 朝日社会福祉賞受賞

2000年 アジア太平洋賞特別賞受賞

2002年 若月賞受賞 (佐久病院)

第一回沖縄平和賞受賞

日本ジャーナリスト会議賞受賞

2003年 ラモン・マグサイサイ賞(平和・国際理解部門)受賞

主な著作 「ペシャワールにて」 [石風社1989]

「アフガニスタンの診療所から」 [筑摩書房1993]

「ダラエ・ヌールへの道」 [石風社1994]

「医は国境を越えて」 [石風社1999]

「医者井戸を掘る」 [石風社2001]

「ほんとうのアフガニスタン」 [光文社2002]

「辺境で診る辺境から見る」 [石風社2003]

「空爆と「復興」」 [石風社2004]

以上のほか現在にいたるまで著作多数

皆さん、こんにちは。中村です。きょうは宮崎に十二年ぶりにお招きいただきありがとうございます。どうぞございます。

タイトルが「アフガンで大地の医者となる」といえば聞こえはいいですけども、私は二週間ほど前まで現場にいましたが、今は土木工事の監督などをやっております。一週間後には現場に戻りますけれども、今アフガニスタンで何が起こりつつあるのか、そして、日本とどういう関係があるのか、人権の問題とどういう関係があるのか、ひとつ私たちのこれまでの活動の歩みをそのまま紹介いたしますので、何かのお役に立てたらというふうに思っております。現地の実情というのは、なかなか行ってみないとわからないということも多々ございますので、私が当然と思つて話していることでも、何のことだろうということも疑問もありません。後ほどなるべく時間を使つて質問に答えるという形で話を展開していきたいと思つております。何を聞かれても怒りませんので、どうぞ何でも質問してみてください。

ともかく今日は、最近の様子も含めまして、私たちが歩んできたこの二十二年間をスライドを使ってそのまま紹介いたします。



写真1

(写真1) ペシャワール会というのは、名前のとおりパキスタンの北部にありますペシャワールという国境の町を拠点にして、アフガニスタン、パキスタン両国にまたがって活動が続けております。どうして両国にまたがざるを得ないかというと、この国境地帯は同じ民族のパシュトゥン族が約二千万人住んでおりまして、それぞれ一千万ずつがアフガニスタン、パキスタンに分かれています。実際は人々の間では行き来自由で、パキスタンの北西部というのは、アフガニスタンの一部でありながら、行政上はパキスタンのもとにあるという奇妙な位置にあるわけです。私たちの活動も、勢い、両国にまたがって広からざるを得なかったということでございます。

医療活動が約百名の職員、それから水源確保事業に百数十名の職員がおりまして、臨時の作業員を入れますと、約一千名が私たちの事業に参加しています。これを支えるのが日本のペシャワール会で、年間二億五千万円の予算のすべてが、日本の側の会費と募金で成り立っております。二億五千万円というとODAだとか国連のお金に比べると小さいですけども、その地域にとって必要なものは何かということを認識して使えば決して小さくはありません。日本側からの公的資金に頼りますと、日本人を喜ばせるような活動をせざるを得なくなり、現地ニーズと食い違ふことも起こります。私たちとしては、徹底した

現地主義、現場主義というのを貫きまして、現地にとって必要なものは何かということを中心に考えて活動しているわけです。

ちなみに、ペシャワール会の会員は約一万二千名、実質募金者は約二万名、こういう人たちの良心と現地で働く日本人ワーカーや現地人スタッフが現地の活動を支えておると、こういうことでございます。



写真2

(写真2) 幾つかアフガニスタンについて知ってもらいたいことがあります。

まず、アフガニスタンというのは山の国なんです。東のヒマラヤ山脈とずっと連続しております、一番西にある「世界の屋根」と呼ばれるのがカラコルム・ヒンズークシユ山脈、アフガニスタンはこのヒンズークシユ山脈がすっぽりと中に入るぐらいの広さがあります。面積は日本の約一・七倍、人口は約二千万人と言われておりますけれども、その国土の大半がヒンズークシユ山脈という高い山で占められておるとい

うことなんですね。その山の規模も並みのものではなくて、六千メートル級、七千メートル級の山が普通である、こういった山岳地帯でございます。

アフガニスタンの二千万人の人口の約八割が農民で一割が遊牧民でございます。私がいづも日本に帰って不満に思いますのは、アフガニスタンの都市部、首都カブールの映像だけが流されるということです。これはどうもアフガニスタンについて誤ったイメージをつくってきたんじゃないかなと思えるわけです。実は、アフガニスタンの中で首都カブールというのは、一般のアフガン人にとって特殊中の特殊な地域でありまして、大半の人々はこのスライドのような山合いの村々で自給自足、自分の食べ物是自己で耕してつくっていくという生活をしている人たちがほとんどでございます。往々にして外国の人々の目に触れるのは、私たちの日本と余り変わらないような都市部の、それもカブールという近代都市、現地から見れば超近代都市の模様だけでありまして、普通の人々の暮らしというのはなかなか伝わらないということがございます。

さらに、山の国で深い谷合いで囲まれているということは、これは地方自治にもつながることですけれども、各地域が割拠しております、谷ごとに国があるといっても差し支えありません。日本のように、国会議員が選ばれて、国会で何か決まったら、一億三千万





写真3

人の日本人に日本政府の法令が行き渡るといふような国ではない。強いていふならば、日本の中世から戦国時代の世界に近い、侍と百姓が未分化な世界だと考えて差し支えない。アフガニスタンという国の実体は、ちょうど日本の戦国時代と同じように、各地域が一見ばらばらなようでも、共通のアフガニスタンという天下のもとにまとまっておる。このあたりがなかなか伝わらないですね。だから、極端に言くと、地方の人々にとっては、都のカプールがどうなろうと、自分たちの生活にはほとんど影響ないというのが実感であります。こういった人々の声はなかなか上がってこないという実態があるわけです。

(写真3) 現地では一〇〇%近くの人々がイスラム教徒です。イスラム教という、日本では暗いニュースが多うございますけれども、実際に現地に行きますと、私たちと余り変わらない、そ

の辺を歩いてるおじさんおばさんとちつとも変わらないですね。ただ違いますのは、各自治共同体の中心には必ずモスク、仏教で言うお寺、キリスト教で言う教会のようなものがあります。ここが地域のいろんなもめごとの解決をしたり、あるいは隣村との争い、あるいは犯罪者の処罰まで含めまして、自治組織の中心となっておる、そうしてアフガニスタンという世間が回っておるというのが実態なわけです。

(写真4) さらにこれは一般的でありますけれども、貧富の差が甚だしい。片やちよつとした病気で東京やニューヨークやロンドンに飛んでいける人があるかと思つ一方で、数百円といわず、数十円のお金がなくて死んでいく人の方が数知れない、こういう世界でございます。

往々にして外国に届く声というの



写真4

は、英語がしゃべれて、そして都市に住んでいて、考え方も我々とよく似ているという人々の声の方です。普通の貧しい人たちの声というのは、なかなか我々の耳に入ってこないという現実があるわけです。私たちとしましては、いかに少ないお金で多くの貧しい人々に恩恵を及ぼすかという配慮をせざるを得ないということでございます。



写真5

(写真5) 私たちの活動は、私が二十二年前の今ごろだったと思いますけれども、現地の「らいコントロール五年計画」、今ハンセン病と呼んでおりますけれども、これに参加するという形で始まりました。

赴任した病院は、患者二千四百名に対してベッド数が十六床、私の任務は、このハンセン病の合併症の治療センターをつくるということでしたけれども、行ってびっくりしたんですね。この写真に写っているのは、当時ありましたすべての医療器具でございます。押せば倒れる、トロリーが一つと、耳にはめるとけがをする聴診器が一

本、それからねじれたピンセットが数本という状態でありまして、これでは「医療は物や金ではない」と言いますけれども、やはり「物や金だけではない」というのが正しいわけで、さすがにショックを受けました。そんな次第で、ペシヤワール会の募金活動が活発になって現在に至っているわけでございます。



写真6

(写真6) きょうは、ハンセン病について詳しい話はしませんが、ハンセン病というのはいろんな治療の局面がありまして、皮膚科や神経学だけではなくて、手足が麻痺しますので、それをまた動かす再建手術だとか、あるいは整形外科、形成外科、眼科と、いろんな分野が総合してできた一つの「らい病学」というのをつくっております。現在、改善に改善を重ねまして、私たちの病院は、アフガニスタン全土、それからパキスタン北部で唯一まともなハンセン病の合併症を治療できる病院として機能しております。こういう診療風景をお見せしますと、私は医者でいかにも医療活動しておる

ということがよくわかりますけれども、私たちの活動の大部分は一見医療とは関係のないところに注がれてきました。



写真7

(写真7) 一番大きいのは、やはり現地の人々をいかに理解するかということなんです。これはやはりそこに長くいないとわからない。外国人がつまずくのは、言葉が通じないというだけではなくて、その地域の習慣がわからない。そのために違和感を覚えてそこを去っていくということがしばしばありました。例えば、現地では女性が外出する際にかぶりものをする習慣がある。しかも、男女隔離というのは非常に厳しいものがあります。女性に対するいたずら、特に婦女暴行なんていうのは現地では死罪でございます。

こういった厳しい社会の中で、私たちも診療するときに気を使いまして、例えば服を脱がせて聴診器を当

てるなんていうことも、女性に対しては非常に失礼な行為に当たるわけですね。だから医療関係者としてはどうも不都合な習慣でありますけれども、外国人が犯しやすいという過ちは、こういった習慣や慣習の違い、単に違いであるものを、おくれている、進んでるといふ優劣のカテゴリーあるいは、これは正しい、これは悪だという善悪のカテゴリーに分けて裁いてしまうということがあるんですね。その結果、現地の人々と衝突する。私は、この会場の方々は人権に関する問題を取り扱っておられるので、おおよそわかっていただけだと思いますけれども、人権会議なんかで、現地の習慣を摘発するということをする外国人がいますけれども、私は、こういった外国人に言いたいのは、そんなにこの女性が心配なら、あなた引き取って見てください、それなら私は信用しましょうと、こう言いたいわけですね。

例えば、日本語はややこしいので国際語の英語に変えてしまえといったら日本人はどうなるのか。それと似たようなものがありました、私たちとしては、こういった文化の相違あるいは慣習の相違というものは、単に相違であつて優劣の問題ではない。異文化には異文化の喜び方、泣き方、悲しみ方があるというのが基本的な認識でありまして、その制約された中で、いかにこの患者の幸せというのを探つてこれを準備するか、これが臨床医学と



写真8

いうものでありまして、日本でも全く同じことでございます。我々としては、これに対して、それこそ現実的に対処するという方針を貫いてきました。

(写真8) そこで、女性の患者に対するケアは外人部隊に頼らざるを得ないということで、今まで一番長い人で十六年、多くの女性ワーカーが日本から来まして女性患者の診療をする。現在では地元の女性ワーカーも少しずつ育ちつつ

あるということ、これも大きな力になったわけです。

(写真9) 私が赴任した一九八四年は、当時、アフガン戦争の真ただ中でありました。アフガン戦争というのは、一九七九年の十二月、当時世界最強の陸軍と言われたソ連軍の大軍約十万人が大挙して共産政権を助けるといふ名目でアフガニスタンに侵攻いたしました。その後、約十年間、アフガニスタンは戦乱のちまた



写真9



写真10

に置かれておりまして、これによって死者が二百万人、難民となって国外に逃れた者が約六百万人、そのうち半分の約三百万人がパキスタン側に難民として逃れてきたわけでございます。私たちとしては、医療の立場から自然にアフガン問題に巻き込まれていきました。

(写真10) 初めは細々と難民キャンプで診療を続けておりましたけれども、ここで私たちは方針を大転換いたします。それは、アフガン難民キャンプだけで診療してもらわなければならないということがわかったんですね。さらに、ハンセン病だけを診る医療というのは、こういった地域では全く役に立たないとまでは言わないけれども、余りに無力であるということですね。ハンセン病が多いところは、同時にほかの伝染病、腸チフス、結核、マラリア、デング熱、アムール赤痢、ありとあらゆる伝染病の巣窟であることが多い。しかも、こういったところは同時に医療設備がほとんどないアフガニスタンの山奥の





写真11

貧しい村々が多いということを、我々身にしみて知りまして、あるハンセン病患者は、「自分はこの病気にかかってよかったな」と言うから、「何でだ。」と聞くと、「こうやって医者も来てくれるし、ただで診てもらえるし、ほかの病気の人はかわいそうだ。」とこう言うわけです。確かにそのとおりでありまして、マラリアで死にかけている人に対して、あなたはハンセン病でないから診ませんというわけにはいかない。そこで、私たちとしては、アフガン戦争が下火になった暁には、アフガニスタンのハンセン病の多発地帯、すなわちそこが無医地区であり、ほかの伝染病も多いというところに診療所をつくりまして、一般診療を行い、ハンセン病も特別な病気として診るのではなくて、いろんな伝染病の一つとしてさりげなく診るという方針を立てて、ハンセン病診療という目標と同時に、アフガニスタンの無医地区における一診療モデルの確立ということをもう一つの大きな柱にして活動を開始したわけでございます。

(写真11) 当時、戦争の真つ最中で、名目上国境は閉鎖され

ておりましたけれども、アフガニスタン、パキスタンの国境は二千四百キロメートルはありますので、絶対に閉鎖できない。無数の間道がある。今でも米軍が、アルカイダのメンバーの搜索活動を続けていますが一向に実が上がりません。戦火は拡大する一方であるというのがこの地域でございます。こういった地域であります、幸いといえますか、私は、

写真12

頭はともかく足だけは自信がありましたので、山から山へ、谷から谷へと国境を越え、アフガニスタンの山奥で診療開設予定地の人たちとつき合いを深めていったわけでございます。

(写真12) これはヌーリスターンと呼ばれるアフガニスタンで最も高いところに住んでいる民族の居住地であります、伝えたいのは、これは決して特殊な地域ではなくて、アフガニスタンで見られる山間の農村のごく一般的な姿ということなんです。標高が二千八百メートル、今でこそペシャワールから三日で着きますけれども、当

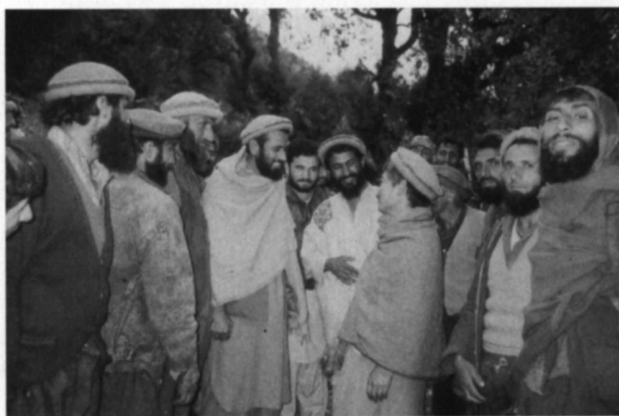


写真13

時、内戦の真つ最中、徒歩とジープで合わせて一週間以上かかった。これがアフガニスタンでは普通に見られる農村光景であると。こういうところではもちろん電気はないし、首都の動きとはほぼ無関係にみんな生きておるといふことでございます。

(写真13) 私が初めてこの村を訪ねたときに村長さんが出てきて、私をフランス人と間違えた。後で知りましたけれども、外国人を見るのは初めてだと。とりあえずフランスという国を知っていたので、フランスか、と聞いてみたということなんです。よく中国人か日本人かということは聞かれますけれども、フランス人というのはさすがに初めてでびっくりしましたが、日本人だと言うと、手のひらを返したように友好的になりました、まるで外国人でないかのような扱いをしてくれた。これはもう十数年前の話ですけど、単に日本人であるがために命拾いしたただか、単に日本人であるがために仕事がうまくいくようになった

とかいうことは数知れずあったということをお伝えしたいと思います。

しかしながら、最近になって、日本に対する失望感が彼らの間に広がってきておりまして、具体的には湾岸戦争からアフガン空爆、イラク戦争、一連の動きの中で、日本はアメリカの属国かというふうな声が一般の人々の中にも浸透しつつあるということなんですね。彼らがどうして日本をそんなに評価していたのかといえますと、これも後で知りましたけれども、彼らが日本について連想するものが三つある。それは、日露戦争、さらに広島、長崎。この三つだけは、どんな山奥に行っても、どんな学問のない人でも知っている。戦争がいい悪いという話は別といたしまして、日露戦争は百年前始まった当時、欧米列強の植民地下にありましたアジアの人々は、かわいそうに日本もロシアの植民地になっ てしまうかと思っていたら、案外日本が勝ったとは言わないまでも負けなかった。つまり、どんなに相手が大きくてもぺこぺこしない日本という独立不羈ふきの精神の国だという美しい誤解、それから、広島、長崎については、単にかわいそうだというだけではなくて、あのみじめな状態から見事に立ち上がり、現在の繁栄を築いた。しかも、繁栄する国は戦争をするもんだけれども、五十年間も戦争をしなかったのはすごいと、こういった平和な国日本というのが非常に好感を持たれておりまして、強い者にぺこぺこしない、簡単に武



写真14

力を行使しないという印象が対日感情をよくしてきたということ  
じゃなからうかなと思っております。逆にいいますと、それが今  
危機的な状態にあるということは、ぜひ伝えておく必要があるん  
ではないかなと思います。

(写真14) その後の細かいいきさつは省略しますけれども、その  
後、一九八九年にソ連軍が撤退します。  
難民たちは、外国の援助とは無関係に

自分たちで帰っていく。これが一九九二年の五月のことであり  
ましたけれども、当時三百万人おりました難民のうち三分の二  
に相当する二百万人が、戦場が農村から都市に移っていくとい  
う段階の中で、ほとんど独力で帰ったということは、世界じゅ  
うに余り伝えられませんでした。

(写真15) 私たちは、それを待ち構えるように、診療所を三カ所に



写真15

建てていきました。現在機能している診療所は、すべて当時建てられたものでございます。



写真16

両国にまたがる活動が可能になったわけでございます。

(写真17) これからというときに、アフガニスタンを襲ったのが大干ばつでございます。実はこれは今も続いて、むしろひどくなっているのですけれども、なぜか新聞の紙面を飾るのは政治的な

(写真16) そうこうするうちに十五年がたちました。日本でもハ  
ンセン病問題というのはい世紀近くの年月がかかっておりますか  
ら、現地で外国人がちょっと何年か活動して何かができるという  
ものではない。先は長いということで、十五年を一つの節目とし  
まして、ペシャワールに七十床の基地病院を建てたというだけで  
はなくて、社会福祉法人として地元を根  
をおろすということを始めました。これ  
によって、アフガニスタン、パキスタン



写真17

現象、タリバンが倒れたとか、自由とデモクラシーがやってきたとか、そんなことばかりであります。けれども、普通の農民たちにとっては、砂漠化によって、この彼らが食っていける抛り所であります農業そのものが壊滅状態になる。

二〇〇〇年の五月、WHO（世界保健機関）が世界に呼びかけた訴えの中には鬼気迫るものがあった。現在進行中のユーラシアの大干ばつというのは、人類がかつて体験したことのないものである。その中でも最も激しい被害を受けておるのがアフガニスタンで、人口の約半分以上に相当する一千二百万人が被災して、五百万人が飢餓状態、すなわち食べるものがないということです。さらに百万人が餓死と隣り合わせにある。もうすぐ死ぬという訴えを繰り返して行いましたけれども、ついに国際援助というのはあらわれなかった。実際に診療所の周りでも、豊かな水田地帯が、この年、二〇〇〇年の夏からからの大地になってしまった。農民たちが次々と村をあけて逃げ出していく。本当に廃村というのがあつという間に広がっていったわけです。

（写真18）餓死の末期というのは、決しておなかがぺこぺこになってぐったりして倒れるという死に方ではない。大抵、餓死の末期というのは、体がだんだん衰弱してきまして、



写真18

主に下痢症で死ぬ。これは飲み水も足りないという状態で、生活排水を子供なんかで飲んで、おなかを壊してそのまま死んでしまうというケースが非常に多かった。こういう例を入れますと、当時世界保健機関が、百万人が餓死寸前と言ったのは決して誇張ではなかったと思います。

(写真19) 当時、アフガニスタンの九割の家畜が死滅したと言われておりましたが、私たちとしては、残った村人を集めました。村人がいなくなったら診療所も成り立たないわけで、廃村の中に診療所があったって何にもならない。そこで、残った村人たちを集めまして、枯れた井戸をさらに深く掘る、あるいは新たに水の出そうな場所から飲料水源(井戸)を確保するという活動を開始したのが二〇〇〇年の七月、これは現在も継続されておりまして、現在まで約千四百カ所の飲料水源が



写真19





写真20

確保されて、ともかくも数十カ村、三十万人の人々が少なくともその村を棄てずに住んでおるといふ状態になりました。

(写真20) さらに、これはカレーズと呼ばれる現地の地下水路です。簡単にいうと「横井戸」で、地下水を利用したかんがい設備ですけれども、これもまた枯れていく。自給自足の農民たちがほとんどですので、飲み水があるだけでは生きていけませんから、かんがい用水の獲得ということにも大きな力を注ぐようになりました。実際的には、まずカレーズの修復、名前はカレーズですけれども、枯れるんですね。これを四十本手がけまして、三十八本を再生いたしました。

(写真21) これは診療所付近の様子で二〇〇〇年の九月十五日、私の誕生日ですのでよく覚えていただけますけれども、こ

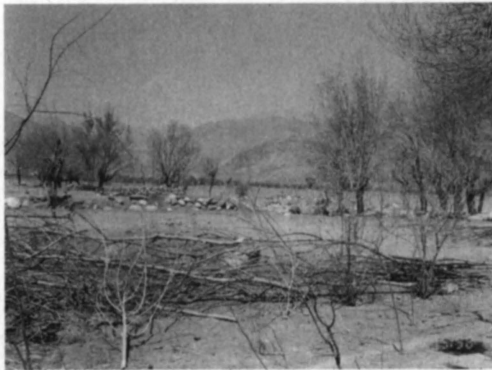


写真21



写真22

こはもともと緑豊かな水田地帯だったんです。それが一木一草もない状態になる。雑草でもいいから生えてくれという状態でした。こういうところに水を注いでやるとどうなるかといいますが、この七カ月後には、緑が甦った。

ちが自然に戻ってくるという奇跡的なことも起きたわけでございます。

(写真23) 私たちが初め考えておったのは、こんな悲惨な状態が世界に知られないことはないだろうと、そのうち大挙して国際支援が駆けつけるので、微力ながら我々はこの限られた地域

(写真22) 二〇〇一年二月、これは小麦ですけれども、同一地区でございます。こうやって約一千家族が自然に戻ってくる。一千家族、約九千人ぐらいの村人た



写真23

で細々と頑張っておこうということだったんですけれども、やってきたのは国際支援ではなくて国連制裁、二〇〇一年一月、国連はアフガン制裁を決定いたします。それは前の年のたしか秋ごろでしたか、ペルシャ湾岸で米軍の駆逐艦が自爆攻撃を受けるといふ事件が起きまして、これはアフガニスタンに巣くっているアルカイダのせいだと、このアルカイダ及びそれをかくまっているタリバン政権を制裁するということでアフガン制裁というのが決定されて実行された。しかし、初めのころ、食料まで制裁の対象にしようとしていたのは、地元の人々にとって許しがたい感じを覚えさせたわけでございます。というのは、先ほど言いましたように、アフガニスタンの農村部では、中央の動きがどうあろうと自分たちは自分たちだという独立性が非常に強い。そこにもってきて大飢饉。さらに外国人が国際的圧力や武力でもって恫喝を加えるというふうにはか思えない。百万人が餓死寸前というときに食料までなぜ制限するのか。この会場の中にお巡りさんにお巡りされている人が混じっているのです、会場を締め切って食べ物をやるなというのに等しいわけです。その後、バーミヤンの仏跡破壊だとかニューヨークテロ事件が起こっていくわけです。二〇〇一年の九月十一日にニューヨークの同時多発テロが起きますと、それに対して翌日からアフガンへの報復爆撃が、当たり前前であるかのごとく言われました。あの当時のアフガニスタン

の実情を知っている人なら、カブールを幾ら空爆したって、お金のある人はもう逃げ出しており、中に残っていたのは難民にもなれない餓死寸前の人々であることはわかっていたはずです。私たちが想像していたのは、冬の迫る時期に空爆を行って交通網が遮断されますと、百数十万のカブール市民のうち一割は生きて冬を越さないだろうということでありました。そこで、すぐ「命の基金」というのを呼びかけて、この空爆下、約二千トン、十数万人が三カ月間、冬の間だけは越せるような食料を配給したわけでございます。これも決して日本人だけではない、勇敢な現地のスタッフたちの手によるところが多うございまして、だれでも爆弾の降る中を食料配りに行こうという人はいませんけれども、職員の中で二十名の人々がボランティアとして名乗り出てくれました。当時、ピンポイント攻撃というテロリストだけをやっつける爆撃であるなんていうことが言われましたけれども、実際現場で見た被害者は、ほとんどが女性、子供、一般市民で、無差別殺戮に近いものでありました。私たちのチームを送る際には、二十名が一発の爆弾で全滅するおそれがありましたので、これを四チームに分けまして、たとえ一チームが全滅しても、ほかの三チームは任務を継続するようにと厳命いたしましたして、幸いだれも死にませんでしたけれども、爆弾の降る中を彼らは勇敢に食料を配給したわけでございます。こういった勇敢なアフガン

人たちの手によって、私たちの仕事は成り立っており、私たちが成り立っているというとも言えます。

(写真24) それと同時に五つの診療所、当時無医地区となっておったカプールに、七、八カ月前から診療所を五カ所に開いておりましたが、これも空爆中も一日も閉鎖せずに運営しまして、弾の下にある人々に大きな励ましを与えたわけでございます。

その後、アフガン解放、自由とデモクラシーの到来、女性差別の象徴であったブルカを脱ぐ女性たちという映像が嫌というほど日本で流される。もし今のアフガニスタンに行つたことがある人なら言つてほしい。今、ブルカ、女性のかぶりものを脱いで歩いている人がアフガニスタンに何人いるかと。ブルカというのは実は女性の伝統的な外出着にすぎなかつた。正義の米国が自由とデモクラシーでアフガニスタンを民

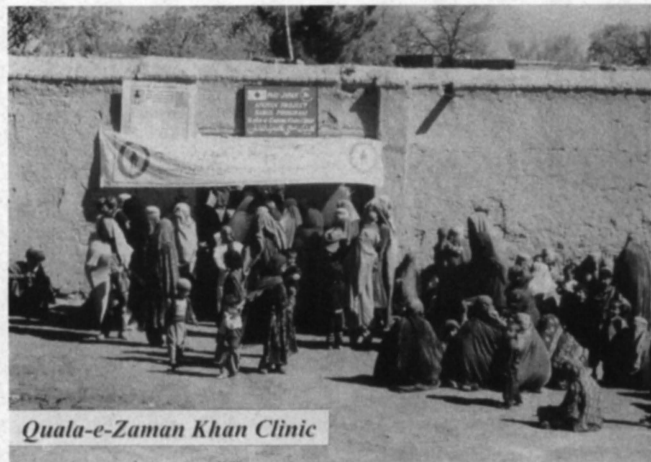


写真24



写真25

主化し、そしてそれを歓呼の声をもって迎えるカブール市民という映像が繰り返し流されました。この五年前にタリバンがカブールを陥落させたとき、私はアフガニスタンにいましたけれども、同じ市民たちがタリバンの旗を振って歓呼の声で迎えた。すなわちだれが来ても歓迎するわけですね。私があるとき思いましたのは、これだけメディアが発達した

世界でも、情報コントロールというのは可能だということなんです。しかも、都市部ほど、みんなフィクションに振り回されやすいと、こういうふうに感じたわけでございます。

(写真25) これは試験農場で、現在、乾燥に強い作付としてサツマイモが有望です。それからお茶も三年間たつてようやく、我々の試験農場ではなくて、一般の農家の栽培したものが有望でして、少しずつ希望が見え始めたということでしょうか。



写真26

(写真26) こういった砂漠化した地域がアフガニスタンにどんどん広がっている。今まで万年雪という形でヒンズークッシュの白い山の雪は巨大な貯水槽の役目をしていたんですが、地球温暖化のために春先になるとどっと解け出してしまふ。つまり貯水槽がからからになつてしまふんですね。洪水はふえるけれども、干ばつは進むというのが現地の実態でありまして、そこで私たちが立てた戦略というのは、四千メートル級の比較的現地の低い山については、これは無数のため池をつくるということ、下の方で貯水せざるを得ないだろうと。さらに六千メートル、七千メートル級の山の雪から流れてくる大河川と、こういうのは、向こう何世紀かは温暖化によつても途切れることはないであろうということ、大河川からは用水路を、それから低い山の雪に頼る地域については無数のため池をと、こういう二本立てで「緑の大地計画」というものを始めました。

(写真27) その第一弾が用水路でして、現在十キロメートル地点に達しまして、今年度ようやく数千町歩のかんがいにかぎつけます。

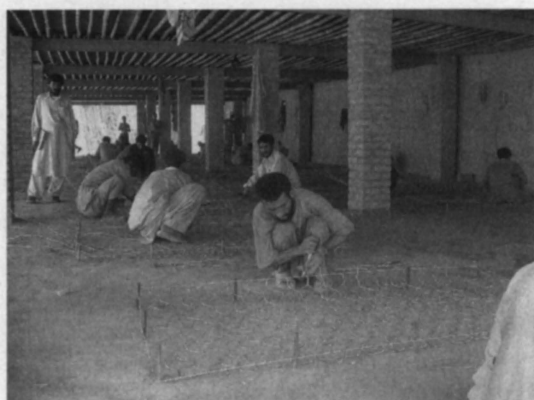


写真28

(写真28) その際に私たちが考えたのは、地元の人でもメンテナンスできるものでないとだめだということなんです。近代的で立派なものをつくれないことはないですけれども、

お金もかかる上に、これが一旦壊れたとなりますと、修復をするのにまた莫大な金がかかる。日本の土木技術というのは世界屈指のものですけれども、つくるのにも修復するのにもお金がかかる。地元の人々でも修復維持が可能であるものをとということ、アフガニスタン現地の技術、それ



写真27





写真29

れから日本の技術でも、既に江戸時代あるいは戦国末には完成していた農業土木技術をアフガニスタン現地に移植するという形で行っており、現在のところはうまく進んでおりません。

これは蛇籠とよばれるもので、昔は竹籠かごといって竹の籠に石を詰めていたそうですけれども、明治以降になりました針金が入ってきて、この針金の籠の中に石を詰めて護岸に使う。これは昭和二十年代まで日本で盛んに使われましたけれども、現在、コンクリートにとってかわったわけです。最近では環境の立場から蛇籠が再評価されつつあるということです。ですから、現地では蛇籠を主体にした護岸を採用いたしました。現在まで三年間に三百五十トンのワイヤーから約一万数千個の蛇籠が生産されました。これも自分たちでやりました。

(写真29) この取水口は、筑後川にあります朝倉郡の山田堰のコピーであります。江戸時代、洪水と闘いながら、人々

はいかにして大きな川から利用できる水を引いてきたか、その日本の農業土木技術というのは世界屈指のものがありますけれども、これも九州の筑後川の斜堰のコピーでございます。これによって春夏秋冬、一定した取水が可能になったわけでございます。

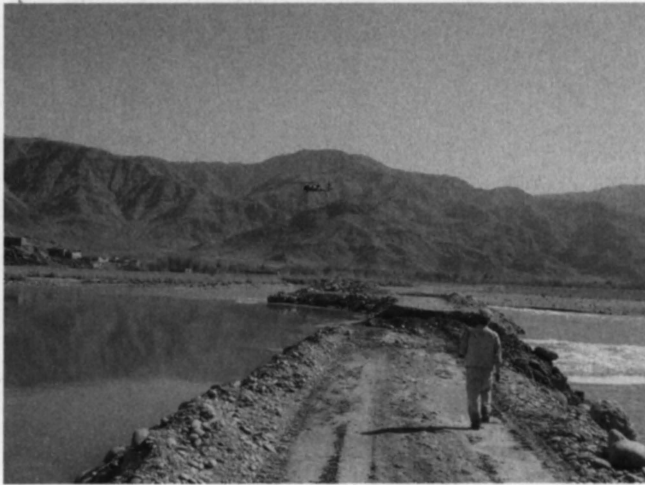


写真30

(写真30) 私たちは、あんなアフガンの危険地帯でとよく言われますけれども、だれにとつて危険かということでありまして、少なくとも地元の人々の生命線である水を扱い、地元の人々が何を欲しているか、その欲していることに協力している限り、我々自身が攻撃されるということはありません。時々攻撃するものがあるとすれば、米軍でありまして、米軍が我々を機銃掃射していくことはありました。現地の体験からいいますと、隣で米国の資金で道路工事をやっているトルコ（後にインドに）の会社がありますけれども、軍隊に守られて仕事をしてるんで



写真31

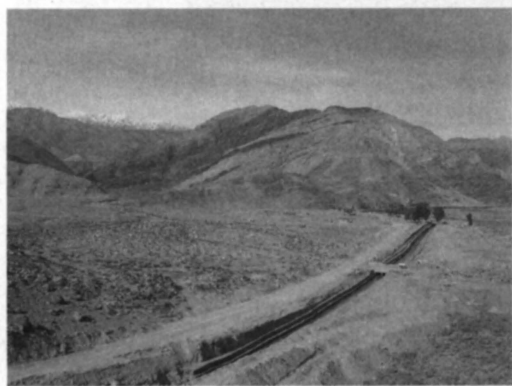


写真32

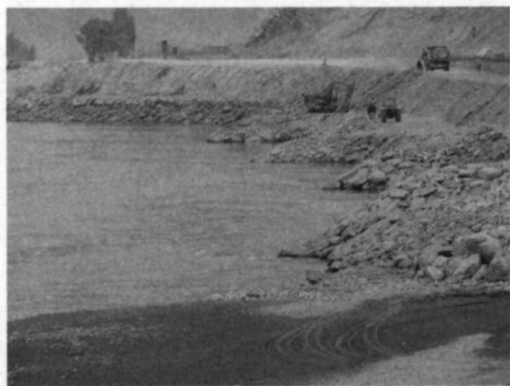


写真33

すね。ところが、誘拐、殺戮事件が後を断たない。本当に役立つことなら、人々が我々を守ってくれる。我々は二十名の日本人ワーカーを抱えて、多いときで約一千名の作業員が現場で作業しておりますけれども、ただの一度として地元民から攻撃されたことはありません。丸腰じゃ危ないということを聞きますけれども、私たちの場合に限っていえば、武装していない方が安全であると言いたいところでございます。

(写真31) これは取水テストがあつた直後でしょうか。地元の約一千名の作業員が集まつてこれを祝いました。

(写真32) 三年たった水路は、今十キロメートル地点まで水を送っております。

(写真33) これも球磨川上流、それから緑川にあります江戸時代の護岸の技術、石出し水制というやつですが、これによつて洪水を切り抜けるということもあります。

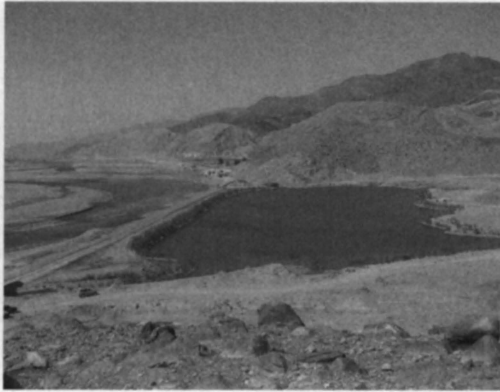


写真34

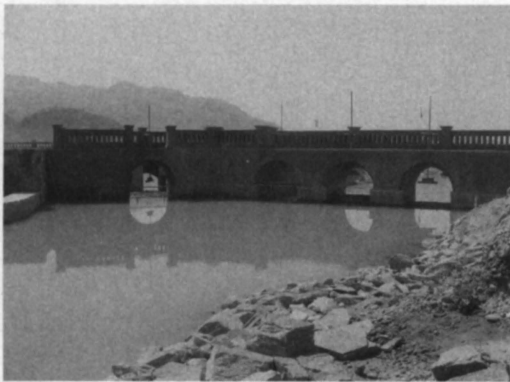


写真35

(写真34) 沈砂池です。

(写真35) これも八代の十連樋門のコピーでございます。

こうして大体明治以前、あるいは明治直後に完成された農業土木技術が現地で生かされておるといふことであります。また安くつくんですね。



写真36

(写真36) 沈砂池です。

(写真37) 水道橋。

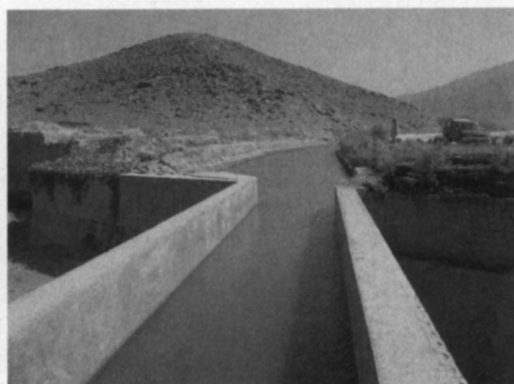


写真37



写真38

(写真38) 一年前からやっとあの砂漠地帯に水が到着いたしましたして、一年前から現在まで約五百から六百町歩のかんがいに成功しております。



写真39



写真40

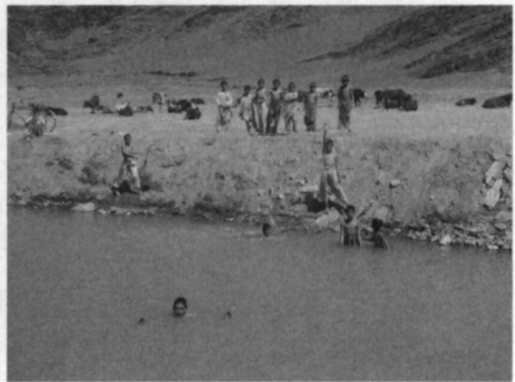


写真41

(写真39) ここも元砂漠だったんですね。これが緑になりました。これは信じられないことだと。現地でもこれ以降、私たちに對する嫌がらせ、非難は一切とまりました。やっぱ実績を見ればみな信用してくれるんですね。

(写真40) これも緑化した地域です。

(写真41) 長くなりましたが、最後に、水路をつくって真っ先に駆けつけるのが動物と子



写真42

供たち。悲惨な話ばかりしましたけれども、では向こうの人が暗い顔をして毎日生活しているかというと決してそうではない。非常に生き生きとしているのです。手伝いに来ている日本人の若者の方がよっぽど暗い顔をしている。(笑い)

(写真42) 私が日本に帰っていつも思うのは、この人たちは飢え死にもしないのに何でこんな暗い顔をしているのだと、そういうことを言っちゃ募金が集まりませんので言いませんけれども、(笑い) 何か暗い。そして不自由なんですね。それも都会に行けば行くほどそれを感じる。この二十二年間を振り返りまして、私たちは人のために、人類愛に燃えてやったかというところを決してそうではない。今振り返って思いますことは、アフガニスタンに行つてよかつたなど、こういうふう

に思っております。

たまに日本に帰ってきて思いますのは、今世界中を覆っておる一つの迷信、それは金さえあれば何とかなる、経済回復さえすればばら色の幸せが待っているという迷信。それから、武力さえあればこの身が守られるという迷信、これらから我々は自由であるということとです。

人間にとって最後の最後まで捨ててはいけなものは何なのか、これは要らないんじゃないかというのは何なのか、目を開かれたような気がして楽しく仕事をさせていただいております。私たちはこの活動を通して、「情は人のためならず」と言いますけれども、結局これは私たちの問題としても何かを投げかけてくれるわけでありまして、私たちのためにもなる仕事だということ、今後も力を尽くしていきたいと思っております。

私の話は一応これで終わりにさせていただきます。どうも御静聴ありがとうございます。  
た。(拍手)



## 質 疑 応

○司会 どうも先生ありがとうございます。余り時間がございました。せっかくの機会ですので、何か質問したいという方はございませんか。海外で活躍なさっておられるわけですので、どんなことでも結構でございます。

○質問 ありがとうございます。今、スライドを見て気になったのは、山の風景がほとんど裸みたいな感じで木がないというか、戦争の傷跡が残っていると思うのですが、植林という活動はないんでしょうか。

○中村 これはもともと岩肌の山がほとんどでありまして、もともと森が少ないんですね。しかし、雪解け水が流れて湿気があるところでは、かつてかなり大きな林なり森があったところもあります。それが水欠乏のため少なくなっているというのが現実で、植林活動は私たちの重要な仕事の一つであります。というのは、川をつくっても、植物の力がなると川を保護できないわけで、まず川沿いに柳をずっと植えます。そうすると、柳の根が、先ほど言いました石垣なり蛇籠なりにずっと根が入り込んでそれを保護してくれるという事で、川沿いには柳。それから、向こうは生活必需品として薪に桑の木を使いますから、家の横に大体桑の木を植樹している。さらに集中豪雨があつて決壊した場所も何か

所もありますので、そういったところには、森とまでは言えないけれども、樹林帯を今造成しております。現地で乾燥に強い木というのは限られていますけれども、主にはオリブ、それからユーカリ、こういうのがたくさん使われております。それから、生活必需品である桑、このあたりが圧倒的多数です。ということで、植樹も重要な水路の部分として我々はやっております。今まで柳だけで、数えたことはないんですが、約一万本までは覚えていますが、数万本は植えられています。桑の木が約五千本、それからユーカリの木が三千本、オリブの木が二千本ということで、その数はますますふえつつあります。

○司会 ほかにございませんか。

○質問 大変貴重なお話をありがとうございます。先生はお医者さんということでお尋ねするんですけども、最近よく無医村の地区が多くなったとか、あるいは若い人たちが僻地医療に行かないとか、あるいは収入と仕事のアンバランスというんでしょうか、産婦人科医と小児科医になり手の学生さんが減っているとか、よくそういった話を聞きますけれども、大変な地区に先生行かれて、お医者さん以外の活動もされているわけですから、何が先生をそこまで駆り立てたのか、そこを一言お聞かせいただければと思います。

○中村 これはどこでも聞かれますけれども、私もよくわからないんです。何がそうさせ

るのか。一つには逃げ足が遅いということがございます。どうも患者を診るのと一緒に、患者の容態が急変したのに、そこを去ろうとは思わないじゃないですか。その気持ちに近いものがあるでしょうね。で、そうこうするうちに月日が流れていったというのが現実で、強いて言うなら、こんな言い回しは古臭いかもかもしれませんけれども、ここで引き下がっちゃ日本人の男が泣くよといった一つの気概といいますか、それが一つの支えというよりはモチベーションになったということは言えるでしょうね。実際、ハンセン病患者をほったらかされてプロジェクトが引き揚げていたり、後どうしたらいいんだと途方にくれている人がいると、それは何とかこつちができれば別ですけども、できることがあれば力を尽くすというのが日本人のいわばモラルとして、私はそれに引きずられてきたと。それがよかったか悪かったかわからないけれども、そうこうするうちに二十二年が過ぎてしまったというのが実情じゃないかなと、かように思っております。

さらに、現地が気に入ったということもあるんですね。これはやっぱり結婚した以上は簡単に離婚するものじゃないんで、特に恋女房とはなるべく長くつき合うということなんでしょうね。そういうことです。

○司会 ほかにございませんか。

○質問 先生のお話を聞いて、よくニュース等でアフガンにおけるタリバン政権、あれを悪だというふうな決めつけ方で大体報道されているんですけども、先生から見られて、タリバンというのはどういうものだったかということをお聞かせいただきたいのですが。

○中村 これは地域によって、それから政治的立場によって随分意見が違うんですね。反タリバンの方で取材していたいろんなジャーナリストは、タリバンのことをすごく悪く言うんですね。ところが、タリバン側で、タリバンというのは主にパシュトゥー人が多かったですけれども、パシュトゥー人側で取材していた人々はあまり悪く言わないわけですね。政治的立場によって、あるいは取材した相手によって随分違いますけれども、少なくとも東部アフガニスタン、私たちがいる東部アフガニスタンにおいては、それまで軍閥の抗争に悩まされ続けた我々にとっては、何かほっとするものがあった。治安の回復は見事だったということと言える。どんな権力でも、権力を取るときは血なまぐさい闘争というのはあります。タリバンももちろんそれをやりましたけれども、私が見た中では、比較的アフガニスタンの実情に沿った政権ではなかったかというふうに思っております。というのは、地域地域の自治組織を大事にして、そこを戦闘するよりは話し合いでもって、自分たちは治安維持軍を進駐させる、治安を守るけれども、あとのことは自分でやってくれと、こう

いう態度で、徳川幕府的な統治方式といえますか、だからこそ、わずか二万人の兵力でアフガニスタンの国土の九〇数%が支配されるということだったんではないかなと思います。

もちろんその陰にはCIAだとかパキスタンの情報部のサポートがあったりして、政治的に黒いこともあるでしょうけれども、一般庶民の立場に立ちますと、タリバン以前は、治安の乱れで婦女暴行は日常茶飯事、強盗はしょっちゅうあると。我々も診療所は襲撃されるわ、自動車が取られるわ、余談になりますけれども、奥地の診療所から戻ってくるとき、私も襲われたことがあります、ジープが二台、突然盗賊があらわれまして、運転手の首にライフルを突きつけまして、自動車のかぎをよこすか命をよこすかと聞いたんですね。運転手は少しも騒がず私を見まして、「ドクター、どっちにされますか」と言うから、（笑い）「じゃ、かぎを渡せ」といってジープは取られる。取り返しましたけれども、こういうことがしょっちゅうあったわけです。私たちは、むしろタリバンによって治安があつという間に回復したということ、少なくとも東部アフガニスタンの人々は評価したということは評価してもいいんじゃないかと思えます。

それから、ケシ栽培がなくなつたんですね。先ほど言いませんでしたけれども、タリバン政権の初めには、タリバン政権自身が麻薬の利益で政権を維持していたという事実もあ

ったようでも、後にはこれはよくないことだとして徹底的に取りつぶして回った。そのために、アフガニスタンにおける麻薬栽培というのはゼロに近くなっておったということがあります。だから、あのときは悪のタリバン対正義のアメリカという色分けが、普通のアフガン人にとっては不可解なものであったということは言えるでしょうね。それ以上言いますと、私はタリバンの味方だとか言われますので、あまり言いませんけれども、話のわかる人たちではありません。ということでもいいでしょうか。

○司会 それでは時間も迫ってまいりましたので、この辺で終わりにしたいと思います。なお、先生の御活躍の様子につきましましては、NHK教育テレビの「知るを楽しむこの人・この世界」という番組の中で、六月五日から連続八回にわたって紹介されることになっております。またごらんください。

また、ペシャワール会の入会御希望の方がおられましたら、受付の方に申込書を置いておりますので、よろしく願います。

大変有意義なお話をしていただきまして、改めて厚くお礼申し上げます。いま一度、先生に感謝の気持ちを含めまして盛大な拍手をお願いいたします。どうもありがとうございます。(拍手)

平成十八年十二月

編集・発行 宮崎県人権啓発推進協議会

(事務局 財団法人 宮崎県人権啓発協会)

所在地 〒八八〇一〇八〇四

宮崎市宮田町一番十一号

TEL 〇九八五(二六)二五〇九